発する因子として本例では動脈硬化の存在や ARB 内服の関与が推察された。

6. 抗リン脂質抗体症候群を合併した血液透析患者に選択的免疫吸着療法が有効であった一例

土井俊樹*¹・浅井真理子*¹・山下哲正*¹・西澤欣子*¹
山下和臣*¹・重本憲一郎*¹・原田 知*¹・碓井公治*²
頼岡徳在*³

一陽会原田病院*¹, 一陽会クリニック*²

広島大学大学院医歯薬学総合研究科分子内科学*³

【症例】 38歳男性。ループス腎炎による慢性腎不全のため平成7年より血液透析中であった。平成15年5月頃より血小板減少を来した。経口ステロイド増量に反応せず、平成15年8月5日血小板2.0万/mm³となり、入院。骨髓検査に著変なく、APTT 75.0秒(対象28.5秒)と延長し、抗カルジオリピン抗体(β_2 -GPI) 18.1U/mlであり、抗リン脂質抗体症候群と診断した。

【経過】 選択的血漿成分吸着器セレソープ(鐘ヶ淵)を用い計4回の免疫吸着療法およびステロイドミニパルス療法を施行した。その結果、血小板数、APTTの改善を認めた。

【結果】 ステロイド単独ではコントロール困難であった抗リン脂質抗体症候群に対して選択的免疫吸着療法が有効であった。

7. Cryofiltration 法の一考案

南方 保*¹・坂井 薫*¹・鄭 昌彦*¹・森 亮子*²
堀口祐治*²・有馬靖佳*³
大阪赤十字病院腎臓内科*¹, 同皮膚科*²
同血液内科*³

【はじめに】 cryofiltration には種々の方法がある。従来の方法(膜分離法)では、短時間で著しい除去低下能を来し、治療不可と考えられた症例に対し、プライミング液と first filter の温熱下にて治療可能となり、臨床症状改善を認めた症例を報告する。

【症例】 58歳男性、IgA型多発性骨髄腫、protein C欠乏症、cryofibrinogen血症による可粘稠症候群を来し皮膚潰瘍を認めた。ステロイド、interferon、エンドキサン等に抵抗。下肢末端の壊死、皮膚潰瘍が進行。protein C欠乏症、cryofibrinogen血症による可粘稠症候群からの皮膚潰瘍と考え cryofiltration を施行。以前他病院にて cryofiltration を施行するも開始直後から回路内凝固を生じた既往あり。第1回目は

プライミング液と first filter を温熱せず施行。分離開始10分にてTMP上昇、分離不十分で中止。第2回目よりプライミング液と first filter を温熱下にて施行。first filter での分離が可能となり、second filter での cryofibrinogen の除去も可能となった。治療後には皮膚潰瘍の改善が認められた。

【結語】 プライミング液と first filter の温熱下により cryofiltration が可能となった。

8. 自己末梢血幹細胞至適採取時期決定における末梢血 CIC count の有効性に関する検討

吉田親正*^{1,2}・池田和真*^{1,2}・小塚輝彦*^{1,2}
久保西四郎*^{1,2}・小出典男*¹・豊嶋崇徳*²
藤井伸治*²・品川克至*²・石丸文彦*²・谷本光音*²
岡山大学医学部・歯学部附属病院輸血部*¹
同大学院医歯学総合研究科病体制御科学専攻
腫瘍制御学*²

【緒言】 自己末梢血幹細胞(PBSC)の至適採取時期決定における末梢血 circulating immature cell (CIC) count の有効性について検討した。

【対象・方法】 1994年から2001年の間に動員化学療法後にG-CSFを併用して自己PBSCを採取した悪性腫瘍患者155例(男性93例、女性62例、年齢中央値49歳、apheresis回数249回)。採取当日の末梢血CIC、白血球数、血小板数等と採取CD34陽性細胞数との関連をretrospectiveに検討した。

【結果】 採取当日の末梢血CIC($\times 10^9/L$)は採取CD34陽性細胞数($\times 10^6/kg$)と強い相関を示した($r=.635$, $p<.0001$)。

【結語】 自己PBSC至適採取時期の決定において末梢血CIC countは有効な指標であると考えられた。

9. 血管再生のための造血前駆細胞採取と処理

小野希代子*¹・佐藤貴之*^{1,2}・前田 猛*^{1,2}
大西達人*^{1,2}・細野奈穂子*^{1,2}・松山文男*^{1,2}
大淵貴美子*¹・池田康雅*¹・伊禮仁美*¹
四木行永*¹・坪井浩美*¹・渡辺幸子*¹
上田恭典*^{1,2}・高橋夏来*³・池田篤史*³・小島洋児*³
門田一繁*³・光藤和明*³
倉敷中央病院血液治療センター*¹
同血液内科*², 同循環器内科*³

【緒言】 最近、造血前駆細胞を用いた組織の再生が試みられている。我々も、閉塞性動脈硬化症や、Burger病で、下肢末端の著しい疼痛や壊死を生じて